

[書 評]

Roland Betancourt

Sight, Touch, and Imagination in Byzantium

Cambridge: Cambridge University Press, 2018, pp. xvi + 401

ISBN: 978-1-108-42474-5, 235 × 160 × 26 mm, £81.46

土橋 茂樹

著者ローランド・ベタンコートは、2014年にエール大学で学位を取得後、カリフォルニア大学アーバイン校の助教、准教授を経て2020年より同大学の美術史教授を務めている。彼の研究成果は広くビザンツ美術史全般にわたっており、とりわけ視覚に訴える文化および神学研究に取り組む一方で、モダニズムへの関心も深く、2015年には *Byzantium/Modernism: The Byzantine as Method in Modernity* (Brill) を M. Taroutina と共編している。本書は彼の最初のモノグラフとなるが、その後も *Byzantine Intersectionality: Sexuality, Gender, and Race in the Middle Ages* (Princeton U. P., 2020), *Performing the Gospels in Byzantium: Sight, Sound, and Space in the Divine Liturgy* (Cambridge U. P., 2021) と矢継ぎ早に単著が上梓され、現在、斯界でもっとも注目される中堅研究者の一人と言えよう。

本書の意義を理解するためには、初期・中期のビザンツ美術史およびその研究史における20世紀末の動向をあらかじめ知っておくとよいだろう（なお、あらかじめ断っておけば、本書で論じられるような視覚解釈とは別様の視覚理解が見出される後期ビザンツのヘシカズムの文脈については、本書ではほとんど扱われない）。なによりルネサンス絵画の華開く西方のキリスト教美術に比して、一般に平面的かつ線状的で図式的なビザンツ美術はいささか地味で絵画的面白みに欠け、もっぱらアイコン論に関心が集中するくらいがあった。しかし、19世紀後半から20世紀初めにかけて前衛派に注目され、カンディンスキーやクリムト、レジェのような現代画家や、ベルヤグリーンバーグのような現代美術評論家に愛好されることによってビザンツ美術に関する一般的言説にも少なからぬ変化がもたらされるようになった。なかでも20世紀半ばにビザンツ美術史に大きな影響力をもったマンゴー (C. Mango) による〈鑑賞者のもつ文化的解釈背景の相違〉への着目、すなわち「ビザンツ美術にたいする我々自身の評価の大部分は、この

美術が自然主義的ではないという事実由来している：だがビザンツ人自身は、残存する彼らの証言から判断する限り、「自然主義の様式で描かれていないにもかかわらず」それを非常に自然主義的であるとみなしていた¹⁾というマンゴー・パラドクスと呼ばれた彼の指摘は、その後に豊かな議論を引き起こした。その一つの成果が、1995年春にカリフォルニア大学で開かれた vision と *visuality*（強いて意識すれば「自然的視覚」と「社会／文化的視覚」）の差異と相関をテーマとする学術会議を記録した論文集 *Visuality Before and Beyond the Renaissance* (Cambridge U. P., 2000) であり、同書の編者であるネルソン (R. S. Nelson) による所収論文 “To Say and to See: Ekphrasis and Vision in Byzantium” である。その後、ネルソンのその画期的な論考が「触知的視覚理論 (the theory of haptic sight) をビザンツ美術・文化史における特権的な地位に高めた」(p. 1) とみなし、そのように単純化された視覚理論をビザンツ世界に帰したことに真っ向から異議を唱え、古代末期の哲学的感覚論からイコノクラスム前後の神学的感覚論までの膨大な文献を精査することによって徹底的に論駁したのが本書である。

そもそも、同一の絵画に対して〈現代の我々が見ているもの〉と〈ビザンツ人が見ているもの〉の間に対立を見たマンゴーに対して、〈我々が見ていると我々が言うこと〉と〈彼らビザンツ人が見たと彼らが言ったこと〉の間に対立を見出すネルソンは、我々と彼ら各々のテキスト性つまり言説的実践 (*discursive practices*) もまた考察される必要があると考えた。かくしてネルソンは、M・フーコーに倣ってビザンツ人の「饒舌な凝視」を、彼らの「直に触れるかのように見る」という比喩的表現の研究を介して推定しようと試みたわけだが、そうした研究の結果、彼は以下のような結論に至った。

このように画像〔聖像画〕を視覚的に抱擁し、それに口づけることは、比喩的のみならず字義通りの意味をもっていたと私は考えている。あらゆる成功した宗教的象徴主義と同様、この比喩は知覚と知覚理論に基づいている。目から発する視覚光線が見られる対象に触れると考えられていたので、見ることは視覚的のみならず触覚的であり、見えるばかりでなく触感もわかるのである。したがって、視覚が人と視覚対象を結びつけたが、発出光説によれば、〔視〕活動はまさに「見る人」から始まるのである²⁾。

ここでネルソンは、「発出光」(*extramission*) 説、すなわち目から発出した視覚光線が視覚対象に触れ、その本質を直に把握するという視覚理論を、外在する

1) C. Mango, “Antique Statuary and the Byzantine Beholder,” *Dumbarton Oaks Papers* 17, 1963, p. 65.

2) Nelson, *op. cit.*, p. 153.

対象から発出した光線を目が受容するという「受容光」(intromission) 説と対照させることによって、視覚を一種の触覚だとみなす触知的視覚理解を発出光説によって基礎づけ、他方でそうした視覚論がイコン信仰に理論的裏付けを与えるとして、ビザンツ世界に不可欠なものとみなしたわけである。言うまでもないが、ここで問われているのは、現代の生理学的・光学的見地から視覚のメカニズムを解明することではなく、聖イコンを前にしたビザンツ人がそこで何をどのように見ているのか、そのようなイコン信仰をも可能にするような哲学や神学を織り込んだ包括的な視覚理論なのである。神との合一を願う信仰心が、対象との隔たりを条件づけられた視覚に触覚的機能との融合を求めたと説くネルソンにとって、プラトン、ガレノス、ストア派、エウクレイデス、プトレマイオスその他多くの論者が共有する発出光説的視覚論は確かに強力な援軍であったに違いない。

かくしてバタンコートが本書で採った戦略は、第一に、発出光説に基づいて触知的視覚理論を説いたとされる哲学者、神学者の文献をできるだけ広く仔細に精査し、そこで言及されている触知的視覚があくまで修辭的な比喩にすぎず、誰一人として視覚と触覚の融合を肯定的に語ってはいないということをテキスト自体によって証示させる、というものである。ついで第二に、発出光による触知的視覚論に代わる包括的知覚論を、マンゴーの英訳³⁾で広く世に知られ、ネルソンも触知的視覚論のビザンツの典型例として取り上げた9世紀のコンスタンティノポリス総主教フォティオスの説教17を精緻に読み解くことによって、そこから多層的で総合的な新たな知覚論を提示することである。

本書の構成もこうした戦略を反映したもので、「いかにして視覚は触覚でないか」と題された第一部は、視覚の媒体、触知性、そして諸感覚の共有(いわゆる共感覚)をそれぞれ主題とした3章から成り、古典期ないし古代末期からビザンツ期までの主だったテキストが詳細に分析される。本書の中心パートとなる第2部はフォティオスの説教17の第5節を詳細に分析し、「知覚の五段階プロセス」すなわち感覚、理解、想像、判断、記憶の各段階が割り当てられた第4章から8章までの5章構成となる。続く第3部では第1部の3つの章(媒体、触知性、共感覚)にそれぞれ対応する形で、視覚を触覚から引き離す際に何が問題になるかが、文学と美術における表象と仲介の理論(第9章)、典礼におけるイコン崇敬の文脈において文字通り「触れる」という形式と想像力の相関(第10章)、ビザンツ世界全域に見出される感覚横断的メタファーと言語表現のより広い文脈(第11章)の3つの章にわたって明示される。

全編にわたって膨大な量のテキストの具体的かつ詳細な解釈がなされる本書の

3) C. Mango, *The Homilies of Photius, Patriarch of Constantinople*, Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1958.

細部を逐一紹介するわけにもいかないので、以下では、本書をもっとも特徴づける第1部の視覚理論の比較考察(1)と第2部のフォティオスの説教解釈(2)に的を絞って見ていきたい。

(1) ビザンツ世界に見出される視覚理論の諸類型は、現代の研究者にしばしば見出される発出光説と受容光説の二区分よりはるかに複雑に絡み合っていることが示される。

① 視覚の働きを発出光説と「触覚」という語の両方を用いて顕在的に示したほぼ唯一の例が(アンティオケイアのアエティオスの著作にその断片が保存された)ヒッパルコスのテキスト:「目から出てその先端に伸びる光線が、ちょうど手の触覚のように(καθάπερ χειρῶν ἐπαφαίς), 外部の対象を掴み(καθαπτούς), その理解(ἀντίληψιν)を視覚に伝える」(*De placitis reliquia*, IV 13.9)である⁴⁾。しかし、これほど典型的なテキストでありながら、「触覚」はあくまで比喩として用いられ、しかも発出された視覚光線は対象から反射されて目に物理的な刻印をもたらすというわけではなく、あくまで「理解」を伝えると言われている以上、ヒッパルコスが記述しようとしたのは外部の対象が知性認識に至るまでの認知過程であって、対象との無媒介な接触ではなかったことが示唆される(p. 8)。

② 他方、受容光説は必ずしも光線のみならず色や像もまた目によって受容されることで視覚を説明した。たとえば、レウキッポスやデモクリトスら原子論者は対象が自らの似像(εἶδωλα)を発出し、それを目が受動的に受容すると説いた。もっと大きな影響をもたらしたのはアリストテレスの説であるが、視覚者と対象の間の隔たりを空気や水のような透明な媒体が埋め、それが光によって現実態となることによって対象の色が目には伝わるとした点で、視覚における媒体の必要不可欠性を説く立場と言えよう。

③ プラトンは発出光説の典型とみなされてきたが、実際は対象から生じた炎(φλόγα)と目からの視力の流出との統合によって視覚が生起するとみならず、いわば「相互作用説」とでも呼ぶべき第三の立場である。対して、触覚としての視覚という比喩が視覚理論においてもっとも顕著に見出されるストア派(クリュシッポス)は、目から流出した氣息(プネウマ)が目と対象の間にある空気に触れ円錐状の混合体として形成されることによって、「あたかも杖によるようにして」(ὡς διὰ βακτηρίας)対象を見ると主張する(p. 52f)。相互作用説とアリストテレスの媒体説とを重ね合わせたような主張だが、ここでの触知的視覚はあくまで比喩にすぎず、しかも媒介の必要性を強調する点でストア派が視覚を無媒介

4) 西方ラテン語圏ではアウグスティヌスによる触知的発出光説が大きな影響力をもった(「肉眼を通して現れ出て、我々が見るあらゆるものに触れる光」*De trinitate* 9.3.3)。

な接触とみなす説に与することはあり得ない。ガレノスもまたプネウマ流出説をとるが、医師者としての彼の主たる意図がプネウマの流れを増強するか抑制するかによって眼病の回復を図るとした点でこれまで視覚理論としてはあまり注目されてこなかった。しかし、プネウマを表象力と解することによって、本書の提示する知覚理論がもっとも依拠した理論としてベタンコートはガレノスを高く評価している。

④ ビザンツの視覚論において、プラトンとアリストテレスの対立をいかに総合するかが大きな課題であったが、ガレノス説に基づきエメサのネメシオスらによって提示された、プラトンによる目と対象双方からの光の統合 (συναύγεια) を可能にするものとしてアリストテレスによる透明な媒体の第一義性を捉えるという両者の総合の企図は、14世紀ニケーフォロスのクームノスに至るまで継承された。

⑤ エウクレイデスは『オプティカ』定義1で示されるように目から引かれた直線的光線が彼の幾何学の基礎となる限りで発出光論者ともみなしうが、彼は視覚の生理学についてほとんど何も語らない。その限りで彼の視覚光学的な記述は、あくまで反射や屈折の結果を算定する幾何学のためのもので、視覚の認知的側面について語るものではなかった。プトレマイオスの天文学の考察に用いられた発出光説についても同様のことが言える。

以上のようにビザンツにおける視覚理論は実に多様で複雑な競合関係にあったが、そのいずれにおいても、無媒介的に対象に接触し触知する視覚を説く立場は見出し得ないというのが本書第一部の結論である。

(2) コンスタンティノポリスのハギア・ソフィア大聖堂の広大な身廊において867年3月29日にフォティオス総主教の説教がなされた。それは、1世紀以上にわたる聖像画の正当性をめぐる闘い(イコノクラスム)の後、その大聖堂で第一に重要なモザイク装飾の除幕式でのことである。復活祭の前日、聖土曜日に行われた説教において、大主教はその偉大な教会の後陣に描かれたマリアとその子のモザイク画を祝福し、列席した二人の皇帝を讃えた上で、聖像破壊の過ちを再度非難し、ビザンツの画像理論の教えを強調した。説教集に収められたその説教17の第5節の一部を以下に引用し、そこからベタンコートの解釈を具体的に説明したい(以下の和訳は評者によるものだが、引用文中の[k0]などの記号挿入はベタンコートによるものである)。

聖母がその御腕に創造主を赤子として抱いておられます。人は誰であれ、その光景を耳で聞くよりも見るときにこそ、その神秘の大きさに驚くのではないのでしょうか。誰であれ、百万言の言葉にまさる言い表せないほどの〔主の〕へりくだり〔の御姿〕を讃美するために立ち上がるのではないのでしょうか。

なぜなら、たとえ互いを通して〔聴覚と視覚の〕いずれもが他方と一つになるにしても、その働きの点で、視覚を通して内に生じた理解は、耳から入ってきた知識よりもはるかに勝るからです。たしかに [k0] 物語に耳を傾けた人はいたことでしょう。その者は、自分が聞いたことを思考力によって [k2] 思い描き、[k1] 自らに引き寄せたことでしょう。そうして [k3] 抑制された注意力によって判断し、[k4] 記憶のうちに置き入れたのです。しかし、見る力は、そうした聴く力に劣らず、それどころかはるかにずっと大きいものなのです。なぜなら、おそらく見る力もまた [m0] 視覚光線の奔出や流出によって、[m1] まるで視覚対象に触れ、包み込むかのようにして、[m2] 見られるものの形を魂の主導的部分に伝え、[m4] 揺らぐことのない学知を集積するためにそこから記憶に形を引き渡し、伝達したからです。[n0] 知性は形を見て、[n1] それを受け取り、[n2] 思い描いて、[n3] 難なく [n4] 記憶のうちに送り届けたわけです。

著者ベタンコートはこの説教からフォティオスの「知覚の五段階プロセス」説を読み取る。それは、0：感覚，1：把握（理解），2：想像（表象），3：判断，4：記憶→知識，という五段階であり、それらがk：聴覚，n：視覚，m：視覚に関する記述という三つの文脈で示される。聴覚の場合、まず物語に耳を傾けた(k0)人は、それを思考力(διάνοια)によって自らに引き寄せ(k1)、聞いたことを思い描き(φανταζομένη)(k2)、抑制された注意力で判断し(k3)、記憶のうちに置き入れた(k4)。対して聴覚に勝る視覚においては、「見る」ことは感覚器官における単なる生理的な受動にとどまらず、すでにして知性(νοῦς)が介在する認知の前段階(n0)として捉えられ、そうした事態を表現すべく「視覚光線の奔出や流出(πρόχυσις καὶ ἀπορροή)」(m0)という発出光的記述が敢えて用いられたものと思われる。認知の第一段階は対象ではなく対象の形(τύπος)を「受け取る」(n1)ことであり、非物質的な形相(εἶδος)の受容という事態を記述するために「あたかも触れ包み込むかのように」(m1)という比喩的な触覚的表現が用いられる。続いてそうした形相を自ら像化する表象(想像)の働き(n2)を介して視覚対象の表象を魂の主導部分に伝える(m2)。聴覚など他の感覚が表象に基づいて注意深く判定する段階を要するのに対して、視覚は表象段階がすでにしてストア派のいわゆる「把握的表象」にあたるため、即第四段階の確固とした知識の段階に進むことになるわけである。

フォティオスは百科全書的な学識に富んだ人物として知られており、前述したような錯綜を極めた当時の視覚理論の競合にも惑わされることなく、「見る」という認知機能の包括的な記述を、大聖堂で説教を聞く必ずしも哲学的視覚理論に通じていない多様な階層の人々にも理解できるよう簡潔に、しかしその根底に確

固とした体系的理解をもちながら説いたものと思われる。

いずれにせよ視覚が触覚の一種であると言うことは、思考や認知、記憶、行為と関連したビザンツの知覚実践の入り組んだ複雑さを無視することになるだろう。マンゴの翻訳を敢えて叩き台として批判的に読み替えていくことによってベタンコートが目指したのは、決してビザンツの新しい規範的な視覚理論を生み出すことでも、視覚に関するあらゆる説明の包括的な研究成果を生み出すことでもなかった。むしろ各々の作家たちが視覚にまつわる触覚言語をどのように用い、またそれと格闘したのか、それにもかかわらずその一方で視覚者と視覚対象との直接の触れ合いの言い表しがたい経験を特徴づけるために触覚が用いられる場面で、彼らがいかにして触覚と視覚の分離を公然と伝えたのか、それを明らかにすることだったに違いない。引用はすべて原文と英訳が併記されており、この1冊を丹念に読みこなせば、ビザンツ美術史における感覚・知覚論の枢要テキスト箇所がほぼ一覧できるほどコンパクトに纏められている。総論としての限りでは極めて整合的な読み筋が展開されるが、著者がマンゴの著作を叩き台にしたように、本書を叩き台とすることによって各論部分の批判的読み替えを進めることが我々に残された課題と言えるだろう。